北星学園大学社会福祉学部北星論集第55号（2018年３月）・抜刷

大学生のグループへの同調行動に及ぼすシャイネスおよび集団凝集性の影響

栗　林　克　匡

大学生のグループへの同調行動に及ぼす シャイネスおよび集団凝集性の影響

栗　林　克　匡
Yoshimasa KURIBAYASHI

目次

Ⅰ．問題
Ⅱ．方法
Ⅲ．結果
Ⅳ．考察
　引用文献

〔Abstract〕
The Effects of Shyness and Group Cohesiveness on University Students' Conformity Behavior

This study examined the effects of shyness and group cohesiveness on conformity behaviors and friendship motivations. A total of 136 university students imagined the group that they spent the most time with. Participants were asked about (a) conformity behaviors of group members, (b) friendship motivations, (c) the cognition of group cohesiveness, and (d) their shyness. Main results were as follows: (1) shyness caused both internal and external conformity behaviors to increase, but had no effects on friendship motivations; (2) participants who rated the group cohesiveness highly had high "identified" and "intrinsic" motivation and low "external" motivation, but group cohesiveness had no effects on conformity; (3) some friendship motivations were correlated with conformity behaviors. The direct effects of shyness and the possibility of indirect effects of group cohesiveness on conformity behavior are discussed.

Ⅰ．問　題

私たちは日常生活の中で何らかの集団に所属し，その集団から様々な影響を受けている。その影響のひとつが同調行動である。藤原（2006）は，同調行動を「自分とは異なる意見・態度・行動を周囲から求められたとき，迷いながらも周りの意見・態度・行動に合わせてしまうメカニズム」と定義しており，またその同調行動には，内心から他者の意見や行動を受け入れる「内面的同調」と，表面では同調しているようにみえるが内面では異なる「表面的同調」に分けられると述べている。葛西・松本（2010）は友人関係における同調行動を量的に測定する尺度を開発し，「仲間への同調」と「自己犠牲・追従」の2因子を確認した。前者の因子は「内面的同調」，後者の因子は「表面的同調」と対応すると考えられる。

同調行動に影響を与える要因として，Hogg（1992）は，集団凝集性を挙げており，集団凝集性が高い集団では集団の基準に同調し斉一的な集団内行動をすると指摘している。集団凝集性とは，メンバーを自発的に集団にとどまらせる力の総体のことであり，操作的には個々のメンバーが集団全体や他のメンバーに対する魅力度などで測定されることが多い（亀田,1999）。木下（1964）は，高校生を対象とした実験室実験を行い，集団凝集性と課題の重要性の2要因を操作して，同調行動へ

キーワード：シャイネス，集団凝集性，同調行動，友人関係への動機づけ
Key words：Shyness, Group Cohesiveness, Conformity Behavior, Friendship Motivation

の影響を検討している。その結果，集団凝集性が高く，課題が重要な条件において最も同調が生起していたが，２つの要因を比べると集団凝集性の方がやや強い影響力を持っていたようである。

また同調行動に影響を与える要因として個人特性も無視できないだろう。先行研究では個人特性の要因として例えば，自己意識（Froming & Carver, 1981；Santee & Maslach, 1982；吉武, 1989；黒沢, 1993； 押見, 2000）や自尊心（Santee & Maslach, 1982）などが検討されている。本研究では個人特性として，シャイネスを取り上げる。シャイネスは「他者から評価されたり，評価されると予測したりすることから生じる対人不安と行動の抑制という特徴を持つ感情－行動症候群」である（Leary，1986）。シャイネスの高い人は，口数が少なく自己開示に乏しい，声が小さく口ごもる，視線を合わせないなど回避的な行動や過剰な微笑や他者への同意など防衛的な行動といった特徴がある（Nelson-Jones, 1990）。これらの特徴からシャイネスの高い人は，同調行動を生起させやすいと考えられる。なお同調行動との関連については，シャイネスの近似概念である対人不安（Santee & Maslach, 1982）や対人恐怖心性（本田・梶原・堀川・森・一期崎, 2013）を取り上げた先行研究があり，いずれも同調行動と正の相関が確認されている。さらに言えば，対人恐怖心性は同調行動の中でも表面的同調にあたる「自己犠牲・追従」因子との関連性がより強かった。

本研究の目的は，集団凝集性とシャイネスの２つの要因が組み合わさった時に同調行動へどのような影響を及ぼすのかについて検討することである。集団凝集性の程度に関わらずシャイな人は同調するのか，あるいはシャイネスの程度に関わらず集団凝集性の高い場合には同調するのかといったことについて，探索的に検討を行う。シャイネスの要因は，同調行動の中でも表面的同調への影響が特に大きく，集団凝集性の要因は内面的同調への影響が特に大きいと思われる。

なお，この２つの要因の同調行動への影響過程の相違を浮き彫りにする１つの視点として，その背景にある「集団に所属する理由（動機づけ）」を考慮する。岡田（2005）は自己決定理論の枠組みから友人関係への動機づけ（友人と親しく，一緒に過ごす理由）を尋ねている。自己決定理論ではRyan & Deci（2000）によると，①外的理由（外的な報酬や罰などの他者からの働きによって行動が開始される），②取り入れ的理由（不安や義務，自己価値維持のために行動する），③同一化的理由（個人が重要だと価値を認め自発的に行動する），④内発的理由（興味や楽しさなどポジティブな感情から行動する）の４つの理由が想定されている。本研究では所属グループを１つ思い浮かべた上で，この４つの理由と同調行動との関わりも併せて検討する。シャイネスと集団凝集性の要因は，集団に所属する理由に影響を与え，またその理由の違いが，内面的同調や表面的同調それぞれの生起と関連すると思われるためである。具体的には，「外的理由」「取り入れ理由」は表面的同調と関連し，「同一化理由」「内発的理由」は内面的同調と関連すると思われる。

Ⅱ．方　法

調査参加者：大学生139名のうちデータに不備のない136名（男性53名，女性83名）を分析対象とした。平均年齢は19.96歳（SD＝1.28）であった。調査は2016年９～10月に実施した。

質問紙の構成：性別・年齢などの基本的属性の他，以下の尺度に回答させた。その際，参加者が所属している集団のうち一緒にいる時間が長いグループ（家族以外）を１つ思い浮かべてもらった。

①所属集団の実態：想起したグループの種類・人数・所属期間について回答させた。
②集団凝集性：新井（2004）の集団凝集性尺度８項目を５段階（１.あてはまらない～５.あてはまる）で回答させた。
③同調行動：五十嵐・野村・岩﨑（2014）の同調行動尺度から「仲間への同調」９項目と「自己犠牲・追従」９項目を４段階（１.ほとんどあてはまらない～４.とてもあてはまる）で回答させた。
④集団に所属する理由：岡田（2005）の友人関係への動機づけ尺度から「外的」「取り入れ」「同一化」「内発」の４下位尺度（各４項目）計16項目を用いて，思い浮かべた集団に所属する理由を５段階（１.あてはまらない～５.あてはまる）で回答させた。
⑤シャイネス：相川（1991）の特性シャイネス尺度16項目を５段階（１.まったくあてはまらない～５.よくあてはまる）で回答させた。

Ⅲ．結　果

１．想起したグループについて

参加者が想起した所属グループの内訳と構成人数の平均値は表１のとおりであった。最も多かったのは，学校の友人で60％以上の者が挙げていた。続いてサークル・ボランティアで約20％であった。また各グループの構成人数の平均は，学校の友人で５～６人，サークル・ボランティアは30名程度の集団であった。所属期間の内訳は表２に示した。約７割が30か月以下で大学入学以降に所属したグループと思われる。

表１　想起したグループの度数と構成人数の平均値

	度数(％)	構成人数の平均値(ＳＤ)
学校の友人	87(64.0％)	5.21(3.34)
サークル･ボランティア	28(20.6％)	30.41(27.35)
アルバイト先	9(6.6％)	11.44(8.05)
ゼミ	3(2.2％)	9.33(4.04)
その他	9(6.6％)	6.56(5.88)

２．シャイネスと集団凝集性が同調行動および集団所属理由に及ぼす影響

同調行動および集団所属理由各因子についてシャイネス（高群・低群）×集団凝集性（高群・低群）の２要因分散分析を行った（表３）。なおシャイネス得点の平均値48.04（SD＝ 11.49），集団凝集性得点の平均値34.66（SD＝ 5.45）を基に高群と低群に分けた。シャイネスと集団凝集性との相関はｒ＝-.06で有意ではなかった。同調行動と所属理由の得点は各因子を構成する項目の合計値を用いた。その結果，「仲間への同調」「自己犠牲・追従」で，シャイネスの主効果が有意であった（$F(1,132)=4.88, p<.05, \eta_p^2=.04$；（$F(1,132)=15.79, p<.001, \eta_p^2=.11$）。いず

表２　グループ別の所属期間の度数

	6か月以下	7～12か月	13～18か月	19～24か月	25～30か月	31か月以上	計
学校の友人	10	6	26	6	16	23	87
	(11.5％)	(6.9％)	(29.9％)	(6.9％)	(18.4％)	(26.4％)	(100.0％)
サークル･ボランティア	7	1	6	4	4	6	28
	(25.0％)	(3.6％)	(21.4％)	(14.3％)	(14.3％)	(21.4％)	(100.0％)
アルバイト先	1	3	1	2	0	2	9
	(11.1％)	(33.3％)	(11.1％)	(22.2％)	(0.0％)	(22.2％)	(100.0％)
ゼミ	2	1	0	0	0	0	3
	(66.7％)	(33.3％)	(0.0％)	(0.0％)	(0.0％)	(0.0％)	(100.0％)
その他	0	0	0	1	2	6	9
	(0.0％)	(0.0％)	(0.0％)	(11.1％)	(22.2％)	(66.7％)	(100.0％)
計	20	11	33	13	22	37	136
	(14.7％)	(8.1％)	(24.3％)	(9.6％)	(16.2％)	(27.2％)	(100.0％)

表3　シャイネス×集団凝集性別の同調行動および集団所属理由の平均値・SD・F値

	シャイネス低群		シャイネス高群		シャイネスの主効果	集団凝集性の主効果	交互作用
	凝集性低群	凝集性高群	凝集性低群	凝集性高群			
同調__仲間への同調	20.81	20.98	21.88	23.77	4.88 *	1.38	0.97
	(5.56)	(5.11)	(4.80)	(4.47)			
同調__自己犠牲・追従	21.42	20.54	23.96	24.52	15.79 ***	0.04	0.78
	(3.66)	(5.01)	(4.67)	(4.76)			
所属理由__外的	10.46	8.24	9.40	9.09	0.03	4.06 *	2.32
	(3.13)	(3.82)	(3.25)	(3.64)			
所属理由__取り入れ	12.50	12.37	12.04	13.14	0.06	0.58	0.95
	(3.11)	(3.63)	(2.98)	(4.01)			
所属理由__同一化	15.42	17.83	15.00	17.66	0.44	32.34 ***	0.08
	(2.50)	(2.94)	(1.85)	(2.41)			
所属理由__内発	16.46	19.12	16.20	18.75	0.73	49.28 ***	0.02
	(2.79)	(1.52)	(1.83)	(2.22)			

※(　)内はSD　　*p<.05　***p<.001

表4　集団凝集性群別のシャイネス・同調行動・集団所属理由の相関

	シャイネス	同調__仲間への同調	同調__自己犠牲・追従	所属理由__外的	所属理由__取り入れ	所属理由__同一化	所属理由__内発
シャイネス		.27 *	.44 ***	.02	.03	−.15	−.20
同調__仲間への同調	.13		.36 **	.40 ***	.43 ***	.32 **	.19
同調__自己犠牲・追従	.46**	.53 ***		.12	.20	−.06	−.13
所属理由__外的	−.05	.47 **	.28 *		.65 ***	.22 *	.08
所属理由__取り入れ	.10	.50 ***	.27	.67 ***		.43 ***	.26 *
所属理由__同一化	−.26	.22	.07	.14	.05		.69 ***
所属理由__内発	−.21	.18	−.09	−.26	−.02	.60 ***	

※対角線の左下は集団凝集性低群(N＝51),右上は集団凝集性高群(N＝85)

※　*p<.05　**p<.01　***p<.001

れも，シャイネス高群が低群よりも同調しやすいようである。また，「外的」「同一化」「内発」の所属理由で，集団凝集性の主効果が有意であった（$F(1,132)=4.06, p<.05, \eta_p^2=.03$；$F(1,132)=32.34, p<.001, \eta_p^2=.20$；$F(1,132)=49.28, p<.001, \eta_p^2=.27$）。凝集性の高い集団の方が，「同一化」「内発」の理由が高く，「外発」動機づけは低かった。所属理由の「取り入れ」については主効果，交互作用ともに有意ではなかった。

3．集団凝集性の群別のシャイネスと同調行動・所属理由の関係

さらに集団凝集性の群別に，シャイネスと同調行動・所属理由の関係を検討するためにピアソンの積率相関係数を算出した（表4）。その結果，凝集性が高い集団では，「シャイネスと「仲間への同調」（$r=.27, p<.05$）「自己犠牲・追従」（$r=.44, p<.001$）の2つの同調との相関が有意であったが，凝集性が低い集団では「自己犠牲・追従」（$r=.46, p<.01$）のみ相関が認められた。「仲間への同調」と「外的」「取り入れ」との正の相関は凝集性に関わらず認められたが（$r=.40$〜$.50$），「同一化」との正の相関は凝集性の高い集団においてのみ認められた（$r=.32, p<.01$）。「自己犠牲・追従」と「外的」との正の相関は，凝集性の低い集団においてのみ認められた（$r=.28, p<.05$）。

Ⅳ．考　察

本研究では，シャイネスと集団凝集性が同調行動および集団所属理由に及ぼす影響について検討した。まず，シャイネスの影響に注目すると，同調行動についてはシャイネスの

み影響を及ぼしていた。特に表面的同調を表す「自己犠牲・追従」は凝集性に関わらずシャイネスの高い人に顕著に生起するようである。葛西・松本（2010）によると，自己犠牲追従因子は自分を抑えて相手と同じことをしたいという意識を表しており，自分を犠牲にしても友人に合わせようとするものであり，自分は心から納得していないにもかかわらず，友人と同じ行動をする。これは，相手に嫌われたくないというシャイネスの高い人の防衛的反応を反映していると思われる。一方の「仲間へ同調」は，友人や仲間と同じことをしたい，積極的に友人と同じ行動をとりたいという意識を表しているが（葛西・松本,2010），この同調もシャイネスの高い人が取りやすいようである。能動的に他者に合わせることは，自分自身の判断よりも他者の判断を高く評価しており，その価値のある判断から生じる恩恵を享受しようと考えているのかもしれない。所属理由については，シャイネスの高低による違いはみられなかった。シャイネスが表面的同調に影響する背景に，外的・取り入れ的理由が絡んでいるという予想とは異なる結果であった。今後の研究でシャイネスの同調行動への影響プロセスを考える際には，所属理由以外の内的指標（例えば自己呈示動機など）を検討する必要があるだろう。

一方，集団凝集性の影響については同調行動とは関係がみられなかった。内面的同調である「仲間への同調」においても，凝集性の影響がなかったことは意外であった。分散分析において主効果がないことから，集団凝集性は直接的には同調行動には影響しないようであるが，間接的な影響すらないのであろうか。分散分析において交互作用が有意ではないことから，集団凝集性はシャイネスの同調行動への影響を調整することもないということになりそうである。ただし集団凝集性の高低群別の相関分析の結果（表４）から，シャイネスと「仲間への同調」は集団凝集性の高い群のみに確認されていることから，集団凝集性の要因の影響は完全には排除できない。さらに所属する集団の凝集性を高く評価する人は，集団所属理由として「外的」理由を低く，「同一化」「内発的」理由を高く評価していた。このことに加え，表４の相関の結果から，凝集性が高い場合に，同一化理由により内面的同調へと繋がる可能性はあるだろう。しかし，凝集性の高い人は外的理由を低く評価するのに，外的理由は内面的同調を促すなど，凝集性・所属理由・同調行動の三者関係はねじれもあり複雑な様相を呈している。この点については，今後さらに詳細に検討する必要があるだろう。

今回の研究の問題点として，思い浮かべた集団が一緒にいる時間が最も長いグループであったため，全体的に凝集性得点がかなり高めに偏ったことが挙げられる。今後の研究では，凝集性の低い所属集団の設定を適切にして比較検討する必要があるだろう。

〔付記〕

本研究の実施にあたり，中野ほのかさんの協力を得ました。記して感謝いたします。

本研究の一部は，日本グループ・ダイナミックス学会第64回大会で発表された。

〔引用文献〕

相川　充　(1991)．特性シャイネス尺度の作成および信頼性と妥当性の検討に関する研究　心理学研究，**62**(3)，149-155.

新井洋輔　(2004)．サークル集団における対先輩行動：集団フォーマル性の概念を中心に　社会心理学研究，**20**(1)，35-47.

Froming, W. J., & Carver, C. S. (1981). Divergent influences of private and public self-consciousness in a compliance paradigm. *Journal of Research in Personality*, **15**, 159-171.

藤原正光　(2006)．同調行動志向尺度・個人行動志向尺度作成の試み(1)―大学生による小５時代の回想から―　文教大学教育学部紀要，**40**,

1－9.

Hogg, M. A. (1992). *The Social Psycho l ogy of Group Cohesiveness — From attraction to social identity —*. London : Harvester Wheatsheaf. (廣田君美・藤澤等 (監訳) (1994). 集団凝集性の社会心理学—魅力から社会的アイデンテイティへ— 北大路書房)

本田優子・梶原まどか・堀川ひかり・森恵美加・一期崎直美 (2013). 中学生が取る同調行動と対人恐怖心性との関連 熊本大学教育学部紀要, **62**, 239-251.

五十嵐透子・野村珠紀・岩崎眞和 (2014). 大学生の同調行動と文化的自己観および大学適応感との関連 上越教育大学研究紀要, **33**, 107-114.

亀田達也 (1999). 凝集性 中島義明ら (編) 心理学辞典 有斐閣

葛西真記子・松本麻里 (2010). 青年期の友人関係における同調行動—同調行動尺度の作成— 鳴門教育大学研究紀要, **25**, 189-203.

木下稔子 (1964). 集団の凝集性と課題の重要性の同調行動に及ぼす効果 心理学研究, **35**(4), 181-193.

黒沢 香 (1993). 多数派への同調に対する自己意識と自尊心の影響 心理学研究, **63**(6), 379-387.

Leary, M. R. (1986). Affective and behavioral components of shyness : Implications for theory, measurement, and research. In W. H. Jones, J. M. Cheek and S. R. Briggs (Eds.), *Shyness: Perspectives on research and treatment* (pp27-38). New York : Plenum Press.

Nelson-Jones, R. (1990). *Human relationship skills: Training and self-help.* London : Cassell Publishers Limited. (相 川 充 (訳) (1993). 思いやりの人間関係スキル——人でできるトレーニング—誠信書房)

岡田 涼 (2005). 友人関係への動機づけ尺度の作成および妥当性・信頼性の検討 : 自己決定理論の枠組みから パーソナリティ研究 **14**(1), 101-112.

押見輝男 (2000). 自己意識特性と同調行動—同調動機と課題関心度の調節効果— 心理学研究, **71**(4), 338-344.

Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2000). Self-determination theory and the facilitation of intrinsic motivation, social development, and well-being. *American Psychologist*, **55**, 68-78.

Santee, R. T., & Maslach, C. (1982). To agree or not to agree : Personal dissent amid social pressure to conform. *Journal of Personality and Social Psychology*, **42**(4), 690-700.

吉武久美子 (1989). 集団形成パターンと公的自己意識の高低が個人の判断に及ぼす 影響 実験社会心理学研究, **29**(1), 65-69.